

流 浪 の シ ラ ー

シュトゥットガルトからライプツィヒまで

(伝記の試み)

八 亀 徳 也

序

数々のドラマの傑作を残したシラーの一生を俯瞰するとき、我々は、彼の人生も 又一个の大きなドラマであったことに驚嘆せざるを得ない。実に、彼のように宗教心と倫理感に従って、誠実に高貴に厳しく、しかし同時に情熱の奔流に任せて力強くドラマーティッシュに生きた詩人は、ドイツ文学史上数少ないと言わねばなるまい。だが、その人生のドラマも、決して華々しく、或は円滑に進行した訳ではない。彼には絶えず、うたかたの幸福感・生の充実感に接踵する失意・病苦・貧苦が付き纏っていたのである。その艱難に満ちた生涯の中でも、彼が軍医の職のみならず、家族や故国をまで捨て、シュトゥットガルトから逃亡し、劇作家となるべくマンハイムへ落ち延びたものの望みは遂げられず、一旦フランクフルトとオガースハイムに身を潜め、暫くパウアーバハで暮らした後、再びマンハイムに戻ってからは稍身分と生活も安定したとは言え、それも束の間、やがて一年後には劇場との関係が破綻し、遂には、ドレーズデンのケルナーから差し伸べられた救いの手に縋り付くようにしてこの地をも離れて行かねばならなかった、1782年9月から1785年4月までの、二年半余のこの時期ほど波瀾に富み、無慙で悲惨なものはない。

しかしながら、我々は伝記を書く際——抑、伝記や歴史に限らず、言葉

による伝達は、伝えられた事実のみが受け取られ、伝えられなかったものは、恰も生起し存在しなかったかの如く永遠に閑却される、従って、我々の認識と理解も知られたものによってしか成立し得ない、という宿命的な限界を持っているのであるが——どの事実を最も評価するかによって、その叙述も様々に異なって来るのが当然である一方、真実を正しく伝えようとすればするほど、記述に偏向があってはならないのも又当然である。一人人間の、殊にシラーのような人間の生涯の肯定的な面のみを描くことは軽率な方法であろうし、逆に否定的な面を徒に多く述べることにより、却って肯定面を強調しようと図るのは邪道であろう。

ここに、ヨハン・アンドレーアス・シュトライヒャー (Johann Andreas Streicher, 1761—1833) なる人物がいる。1761年12月13日、シュトゥットガルトに生まれた彼は、既に生誕前に石匠のマイスターであった父親を亡くし、当時、領主カルル・オイゲン公 (Karl Eugen, Herzog von Württemberg, 1728—1793) が創立したばかりの軍人孤児院 (Militärisches Waisenhaus) に長じて音楽を学び、その後マンハイムとミュンヘンでピアノ教師及び編曲家として生き、1794年、アウクスブルクのピアノ製作者、ヨハン・アンドレーアス・シュタイン (Johann Andreas Stein, 1728—1792) の娘、ナネテ (Nannette, 1769—1833) と結婚してからはウィーンへ移住し、そこでピアノ教授を続け (モーツァルトの同名の息子、Wolfgang Amadeus Mozart も彼の弟子の一人であった)、やがて妻と共に専念したピアノの製造と改良で大成功を収めたばかりでなく、彼の音楽サロンをウィーンの音楽家の一大社交場とし、夙にその才能を認めたベートーベンに最後まで友情と援助を捧げた音楽家並びにピアノ製作者であった。この人物こそ、嘗てシラーの逃亡に同行し、挫折しかゝった詩人を終始忠実に献身的に (彼は最後に、ハンブルクのカルル・フィリップ・エマヌエル・バッハ (Carl Philipp Emanuel Bach, 1714—1788) の許で勉強する、という当初の計画をシラーの為に放棄せねばならなくなる)、且

つ精神的に経済的に助け励まし、晩年、全く真率な、愛情の籠った筆致でシラーの伝記を著したシュトライヒャーその人である。

流浪中のシラーを描くに当り、私は随所でシュトライヒャーの、このシラー伝に依拠しながら——但し、上の出来事から40年以上も後に書かれたこの伝記の所々に散見する、著者の時間的な錯誤は訂正しなければならないが——先ず最初に、その第一部として、シラーの心中にマンハイム行き
の志が萌してより、シュトゥットガルトを出奔するまでの時期を取り上げたい。以後は、マンハイム、フランクフルト、オガースハイムでの生活から、パウアーバハ滞在及び再度のマンハイム生活を経て、ライプツィヒへ向けて旅立つまでの過程を数回に分けて書く積もりである。

1. シュトゥットガルト逃亡

1782年1月13日の、マンハイム国民劇場での『群盗』初演が成功裡に終わり、上演後、俳優達と和やかな食事と談話を共にし、僅かではあったが4カロリン（44グルデン）の旅費を貰って、ペーターゼン（Johann Wilhelm Petersen, 1758—1815）と一緒に帰路を急ぐシラーの表情はどれほど晴れやかに輝き、その口はどれほど多くの夢を語り、その心はどれほど歓喜と感激で踊っていたことであろう。早くも4日後の1月17日、劇場主事のダールベルク（Wolfgang Heribert Freiherr von Dalberg, 1750—1806）に宛てた礼状の中で、彼は多少の自負を混じえながら喜びと満足を次のように表わしている。「私の観たものは非常に沢山ありました、私は非常に多くを学びました。そして、もしドイツがいつか私の中に一人の劇作家を見出すなら、私はその時期を先週から数えねばならないと存じます。」

（„Beobachtet habe ich sehr vieles, sehr vieles gelernt, und ich glaube, wenn Teutschland einst einen dramatischen Dichter in mir findet, so muß ich die *Epoche* von der vorigen Woche zählen.“）

しかし、マンハイムの観客の熱狂的な歓迎や劇場関係者の厚遇を受け、

その都市の進歩性を見てしまったシラーにとって、彼が軍務を果たさねばならない絶対君主国の首都シュトゥットガルトは、最早この時から彼を圧する灰色の厭悪すべき町となり、逆に彼地に対する憧憬は次第に募る結果となる。ライン川とネッカー川の合流点に位置するマンハイムは、当時ヨーロッパ中の都市の内でも僅かしかなかったように、文化の中心地としての勢力を恣にしていた。選帝侯カルル・テオドール (Karl Theodor, Kurfürst von der Pfalz, 1724—1799) の居所であったその都市には、モーツアルトのような音楽家を誘い寄せられる程の音楽の保護奨励があり、高名な科学アカデミー (Akademie der Wissenschaften) や、クロップシュトック、ヴィーラント、レシングらの所属していたドイツ協会 (Kurfürstliche Deutsche Gesellschaft) があり、又驚嘆的であった古代美術室 (Antiken-Saal)、そして言うまでもなく国民劇場 (Nationaltheater) があった。このような文化都市が、自己の芸術に目覚め始め、初々しい野心に燃える若い詩人の目を奪わない筈のなかったことは容易に理解できるであろう。

一方、シュトゥットガルトでの彼の生活は如何なものであったろうか。

1773年1月16日に、彼は軍人養成学校 (Militärische Pflanzschule、先述の孤児院の後身で、その後公国兵学校 Herzogliche Militär-Akademie を経て、カルル学院 Hohe Karlsschule となる) に入学したが、それが、牧師になりたいという彼自身の、然もそれに育て上げたいという両親の早くからの希望を無視したカルル・オイゲン公の執拗で、半ば命令的な勧めによるものであったことは衆知の通りである。入学後の1774年9月に公が個々の生徒に書かせた学友及び自己に就いての人物評価の中でも、シラーは本来の宿願に触れている。「いと慈悲深き君主様、陛下は、私が如何程の意気込みを以て法律学を選んだか、既にご存知であります。私がおしこれによって、他日我が君主、我が祖國に仕えることができますならば、如何に自分を幸福と思うであろうか、ご存知であります。しかし、もし様

な仕事を神学者として果たせませぬものならば、私は遙かに自分を幸福と思うであります。だが、これに於きましては、私は我が幸福、我が満足は一切の掛かっております、いと英明なる我が君主の思召しに従います。」

(„Es ist Ihnen schon bekannt, gnädigster Fürst, mit wieviel Munterkeit ich die Wissenschaft der Rechte angenommen habe, es ist Ihnen bekannt, wie glücklich ich mich schätzen würde, wann ich durch dieselbe meinem Fürsten, meinem Vaterland dereinst dienen könnte, aber weit glücklicher würde ich mich halten, wann ich solches als Gottesgelehrter ausführen könnte, jedoch hierin unterwerfe ich mich dem Willen meines weisesten Fürsten, bei dem mein ganzes Glück, alle meine Zufriedenheit steht.“) 確かに、シラーは秀れた教師と学友との接触の中で、知識の吸収と精神の錬磨との機会に恵まれ、又優秀な成績を収めて表彰されたことがあったけれども、畢竟、秩序と規律に厳しい軍隊的な学校生活が本質的にシラーの精神と相容れないものであったことは改めて言うまでもない。1775年11月、学校が、郊外に立つオイゲン公の別荘ゾリテューデ (Solitüde) からシュトゥットガルト市内に移転されると同時に医学部が新設され、シラーは翌月ここに移籍する。理由は、公が、彼の芳しくない成績では将来の就職の世話も保証し兼ねる、と転部を促したからとも言われ、又、これまで詩作に熱中して来たシラー自身が、法学の勉強の遅れを取り戻すには最早遅すぎ、医学なら無味乾燥の法学よりも未だ少しは文学に近い、と考えたことによるとも言う。兎も角、この医学部を彼は、1780年12月15日、卒業論文『人間の動物的本性の精神的本性との関係に就いての試論』(≫Der Versuch über den Zusammenhang der tierischen Natur des Menschen mit seiner geistigen◀) を以て卒業する。斯くして、8年間在学した Militär-Akademie から漸く解放された彼は、直ちにオージェ (Johann Abraham David von Augé, 1698—1784) 将軍の歩兵連隊

に連隊付き医官として入隊し、傷病兵の世話と歩哨勤務に就くことになる。しかし、この職は余りにも彼や彼の父の期待を裏切った。連隊付きの医官と言っても、それは見習い医師のような身分に過ぎず、シラーは月々僅か18グルデンという薄給に甘んじなければならなかったのである。父親は、息子の為に作った二着の平服に120グルデンを消費しなければならなかった上、更に一着の軍服をも用意せねばならなかったが、それは彼の支払い能力を遙かに上回っていた。それ故父は、息子が連隊での仕事以外に開業し、私服を着用することを許可して欲しいと請願したが認められなかった。しかし、シラーの待遇がこのようであったのも、公が彼に対して個人的な悪意を抱いていた、或は何か邪な企みを持っていたからでは決してなかった。当時、Akademieの医学部卒業試験に合格しただけでは、正式の医者として開業の認可を受けることが出来ず、ドクターの称号を欲する者は更にチュービンゲンで学ばねばならなかったからである。従って、医学部の卒業生をそのまま開業医として世の中へ送り出せなかったオイゲン公が、それでも、個人の費用で学業を継続する余裕のなかったシラーに一定の職を与えることによって、入学時の約束——専攻は自由に選択してもよい、卒業後は聖職者より恵まれた地位を保証する——を、一部だけではあるが、果たしたことは少なくとも評価されるべきであろう。

しかしながら、このような経済的に不満足な状態にあったにも拘らず、1781年—1782年の軍医時代は、彼の青春期中でも自由を謳歌することの出来た、所謂最も burschikos な時期であった。彼は、二度目の下宿として、連隊補給部長 (Regimentsquartiermeister) の未亡人、フィッシャー夫人 (Luise Dorothea Vischer, 1751—1816) がアカデミーのハウク教授 (Bathasar Haug, 1731—1792) から借りて転貸していた、教授の家の一階の一室に以前の学友カップフ (Franz Josef Kapff, 1759—1791) と共に住んでいたが、その部屋には一脚の大きな机、二脚のベンチ、二台のキャンプ用ベッド、一台のストーブ、壁の服掛けがあったきりで、あとは

一方の隅に『群盗』の棚が置かれており、他方の隅に馬鈴薯が山積みされて空の皿やビンと一緒にごた混ぜになっていた、と言う。今やシラーは、許可さえあれば、ゾリテューデに住まう彼の家族を幾度でも訪れることができたが、彼が何よりも楽しみを見出したのは、寧ろ、嘗ての学友たちとの寄り合い、談論、酒宴であった。その為の場所として或は下宿が選ばれ、或は彼らの行きつけの店「金牛館」(Gasthof zum goldenen Ochsen)が選ばれた。当時の彼らの集いの雰囲気伝えるものとして、シラーが後者に書き残した、次のような落首がある。「立派な野郎たちだよ。ここへ来たが、ペーターゼンなる奴も、ライヒェンバハなる奴もない。畜生め。きょうはマニリュ（一種の簡単なトランプ遊び）はどうなってんだ。みんな悪魔に殺られちまえ。会いたけりゃ、家にいるぜ。あばよ、シラー。」 („Seyd mir schöne Kerls. Bin da gewesen, und kein Petersen, kein Reichenbach. Tausendsacerlot! Wo bleibt die Manille heut? Hol Euch alle der Teufel! Bin zu Haus, wenn Ihr mich haben wollt. Adies, Schiller.“) 長い、桎梏に満ちた学校生活から漸く自由になった若者達が、狭く固苦しい市民生活の枠からも脱して、一方では直向きに純粋さを求めて書物を読み漁り或は議論を交わし、他方では、恰もその反動のように、酒と遊びの中に有り余った熱血とエネルギーを発散させていた生活ぶりを垣間見る時、我々はまさに『群盗』の原画の一部をここに発見する思いがするのである。

1782年5月25日、シラーはカルル・オイゲンの不在を利用して——公爵夫妻は、前年末にアカデミーが大学（即ちカルル学院）に昇格された措置に謝意を表する為、ウィーンの皇帝ヨーゼフ二世の所へ旅行中であつた——再び『群盗』を観るべく、四人の息子をアカデミーで学ばせていた未亡人貴族、フォン・ヴォルツォーゲン夫人 (Henriette von Wolzogen, 1745—1788) と前述のフィッシャー夫人を伴って二度目のマンハイム旅行を敢行した。今回も又無許可であつたが、この旅行は寧ろ、これら二女性

が彼に願って実現したのであった。前以て手紙でダールベルクに依頼して置いた『群盗』上演は俳優不揃いの為に不可能であったが、シラーは代わりに二、三の喜劇を観、劇場主事からは再度懇にもてなされ、彼の表情と握手の中に、自分をここへ呼び寄せて呉れそうな熱意を十分に読み取ることが出来た。それだけに、再び故郷に戻ったシラーの心は、マンハイムに対する、どうしても抑え切れない熱望に燃え立つ一方、シュトゥットガルトに軍医として不自由と圧制の下に、詩才を伸ばせぬまま生きなければならぬ、という運命は益々絶望的に重苦しく彼にのし掛かって来た。加えて、彼が旅先で感染して持ち帰ったインフルエンザは、彼の心を一層侘しく暗胆たるものにした。この、趣味の上では北国でしかないシュトゥットガルトに比べ、あのマンハイムでは彼にとって何と幸運の星辰が輝き、ギリシャ的な気候が支配していたであろうか。帰郷後の6月4日、ダールベルクへ宛てた手紙の中で彼は先ず謝辞を述べた後、以下のように書いている。「しかしそれにしましても、私は、人生の中で最も幸福だったその旅行を殆んど後悔するばかりです。それは、私の故国とマンハイムとの極めて忌まわしい対比によって、シュトゥットガルトとシュヴァーベン全ての景色とが私に耐え難く不快になるほど、私を惑わしてしまったのです。」 („Und doch bereue ich beinahe die glücklichste Reise meines Lebens, die mich, durch einen höchst widrigen Kontrast meines Vaterlandes mit Mannheim, schon so weit verleitet hat, daß mir Stuttgart und alle schwäbische Scenen unerträglich und ekelhaft werden.“) ここに至って、彼はダールベルクにはっきりと心中を打ち明けて切願する。「私は自分の憐れな境遇を十分に感じており、又恐らく自信を以て、より良い運命を得る資格のあることも十分に感じているかも知れません。が、どちらにとりましても唯一——一つの希望しかないのです。偉大な方、私は閣下の腕の中へ身を投じても宜しいでしょうか……このことが今私に、我が身を完全に閣下に任せ、私の全運命を閣下の御手に委ね、

閣下から私の人生の幸福を期待するよう、こんなにも厚顔な気持ちにさせるのです。」 („Ich habe Gefühl genug für meine traurige Situation, vielleicht auch Selbstgefühl genug für das Verdienst eines bessern Schicksals, und für beides nur — eine Aussicht. Darf ich mich Ihnen in die Arme werffen, vortreflicher Mann?… Dieses macht mich nun auch so dreust, mich Ihnen ganz zu geben, mein ganzes Schicksal in Ihre Hände zu liefern und von Ihnen das Glück meines Lebens zu erwarten.“) しかし、困難な問題は、ダールベルクが彼を劇場でどのような形で雇用するか、というより、彼をシュトゥットガルトからどのような手段で呼び寄せるか、という所にあった。何故なら、シラーは、連隊に属している限りオイゲン公の臣下であったし、宮廷国民劇場の経営者たるダールベルクも、ヴュルテンベルクとプファルツの宮廷が友好関係にあった以上、軽挙は慎まねばならなかったからである。そこでシラーは、引き続き手紙の中で、添え書きとしてダールベルクに、引き抜き方法に就いての具体的な、且つ公の心理をよく掴んだ、外交的術策に富む三つの提案をする。

1. シラーの方では医者か余る程いて、どこかポストが空けば人が喜ぶ位であるから、問題は寧ろ、如何にして反抗を許さない公爵に、恰も引き抜きが彼の独裁的な権力によって行なわれるかのような、それが彼自身の行為であるかのような、そしてそれが彼の名誉となるかのような外観を恭しく示すかである。それ故、ダールベルクがシラーの為に公爵に書く手紙の中に、シラーを彼の産物、彼によって形成され、彼のアカデミーで教育された者と見做している、ということ、そして、この使命によって彼の教育機関は、恰もその卒業生が権威ある識者によって評価され求められるかのような尊敬を受けるであろう、ということを書き添えるなら、彼はその面から公爵の心をうんと擦ることになるであろう。

2. ダールベルクが、マンハイムの国民劇場に於けるシラーの滞在を、或任意の期限まで定め、しかもそれが彼の命令で延長できるようにし、その経過後はシラーが再び公爵に仕える、ということにして置けば、引き抜きは完全な脱シュヴァーベンというより、ひとつの旅旅行と同様に解され、それほど耳目を集めない。
3. シラーには、マンハイムで開業し、医学の実習を継続する為の手段が与えられるべきであろう。人々が、シラーの幸福を配慮するという口実で彼を苛めたり、却々行かせなくすることがないように、この項目は特に必要である。

手紙の末尾で更にシラーは言う。「そして焦がれる思いで、私は、この手紙全体の中心であるお願いを繰り返し申し上げます。もし閣下が、どんな感情が私の心の中を掻き乱しているか、その中を読んで下さいますなら、もし私が、どれ程私の精神がこの状況の不快さの下で腕いているか、閣下に鮮やかに描き示すことが出来ますれば、閣下は恐らく——いえ、私はよく存じております——閣下は、公爵への一、二通の手紙によって実現可能な援助を延引なさらないであります。」 („Und nun wiederhole ich mit brennendem Herzen die Bitte die Seele dieses ganzen Briefs. Könnte E. E. in das Innere meines Gemüths sehen, welche Empfindungen es durchwühlen, könnte ich Ihnen mit Farben schildern, wie sehr mein Geist unter dem Verdrüßlichen meiner Lage sich sträubt—Sie würden—ja ich weiß gewiß—Sie würden eine Hülfe nicht verzögern die durch einen oder zwei Briefe an den Herzog geschehen kann.“)

シュトゥットガルトに於ける自分の将来の限界を明白に見極め、自己の才能と使命を悟った今となつては、シラーは唯、マンハイムのダールベルクに全てを委ねるしかなかった。それだけに我々は、この手紙の言葉の中に、青年詩人の大胆な要望と同時に、助けを呼び求める、哀訴にも似た懇

願を聞くのである。

以上ここまででは、シラーが心中に熱烈に感じていたマンハイム行きが必要があるのみであった。が、ここで、外部からシラーをしてシュトゥットガルトに居難くさせ、その企てを助長する一つの事件が偶発したのである。

と言うのは、帰郷後間もなく、彼が忍びのマンハイム旅行をしたことが同伴した婦人の口から洩れ、噂は次から次へと、おまけに、他言しないように、という但し書きまで付いて伝わり、シュトゥットガルトの半ばまでがそれを知ってしまったからである。もとよりこの旅行は無許可ではあったが、シラーの上官で連隊長のフォン・ラオ (Otto Wilhelm Alexander Freiherr von Rau-Holzhausen, 1732—1825) の黙認したもので、唯、シラーが彼に迷惑を及ぼさない、という約束が成されていたのである。噂は当然オジェ將軍の耳に入り、遂にオイゲン公にまで達した。6月末、公はシラーをホーエンハイムの別邸に召し出し問責した。シラーは、違法行為は率直に認めたが、連隊長フォン・ラオの連座に就いては、飽くまでも否定を押し通した。既にアカデミー在学中からの、この若き詩人の才能に瞠目していた公爵は、これまでにシラーの作った諸々の詩や『群盗』に、彼や彼の政治を暗に批判する字句を見出しても容認して来た。だが、彼が知り、フォン・ラオが自白している事をシラーが否定するに至っては、最早寛恕の余地はなかった。彼は、今後、外国と一切の関係を持たぬよう厳しく禁じた上——『群盗』がシュトゥットガルトではなく、マンハイムで初演されたことも公の不興の一因であった——直ちにシュトゥットガルトの衛所本部に赴き、そこへ軍刀を預けて14日間の禁固刑に従うよう命じた。6月28日から7月11日まで刑を受けている間に、シラーは出国を決意する。この決心は、釈放後、7月15日にダールベルクへ宛てて、これまでの経緯を短かく書いた手紙に示されている。「もし閣下が、閣下の所へ参り度いという私の希望は実現出来ると思し召しになるなら、私は唯、それ

を促進して下さることをお願いし度うございます。何故私がこのことを今一層強く願うか、それには、どの手紙にも書けぬ理由があるからでございます。このことだけは全く確実であると閣下に申し上げることが出来ず、即ち、もし私が数カ月の内に閣下の許に参る幸運に恵まれなければ、いつか閣下の側に生きることが出来るという望みは、その期間中に最早絶たれてしまう、ということであります。斯くて私は、止むを得ず、マンハイムに留まることを不可能にしてしまいそうな行動に出なければならぬであります。」(„Wenn Euer Exzellenz glauben, daß sich meine Aussichten, zu Ihnen zu kommen, möglich machen lassen, so wäre meine einzige Bitte solche zu beschleunigen. Warum ich dieses jetzt doppelt wünsche, hat eine Ursache, die ich keinem Brief anvertrauen darf. Dieses einzige kann ich Ihnen für ganz gewiss sagen, daß in etlichen Monaten, wenn ich in dieser Zeit nicht das Glück habe, zu Ihnen zu kommen, keine Aussicht mehr da ist, daß ich jemals bei Ihnen leben kann. Ich werde alsdann gezwungen seyn, einen Schritt zu thun, der mir unmöglich machen würde, zu Mannheim zu bleiben.“)

シラーは始めの内、最善の結果を期待していた。彼は只管、ダールベルクのこれまでの言葉と、これからの尽力に信頼を置いていたのである。しかし、今回の、オイゲン公との不祥事が齎らした彼の不利な状況に係わることによって、隣国の宮廷との関係が悪化せぬとも限らない、と次第に彼の支援に関して消極的にならざるを得なかった宮廷人としてのダールベルクを彼は予期していなかった。彼は返事を待った。が、便りの来ない日が何週も何週も経過した。彼は不安と焦燥の気持を、次作ドラマ『フィエスコ』に没入することによって鎮めるしか外なかった。

ところが、ここに、シラーとオイゲン公との軋轢を完全ならしめ、逃亡の意志を固めさせる事件が起こった。所謂、グラウビュンデン事件(Grau-

bündner Affäre) である。

『群盗』第二幕第三場で、シラーは、ラーツマンに向かって誇らしく悪道説く奸佞シュピーゲルベルクに次のように語らせている。「——と言うのは、いいかい、俺はいつも口癖のように言ってるんだが、まともな男ならどんな柳の切り株からでも作れる、が、悪党になるにゃあ頭が要るんだ——更にその為には、独特の民族的天才、或種の、言わば悪党の風土というやつも必要なんだ。そこでお前に教えてやるが、グラウビュンデン州へ行ってみろ、あそこは現代のごろつき共のメッカだぜ。」(„— denn siehst du, ich pfleg immer zu sagen: einen honnetten Mann kann man aus jedem Weidenstumpen formen, aber zu einem Spizbuben wills Grünz — auch gehört darzu ein eigenes National-Genie, ein gewisses, daß ich so sage, Spizbuben Klima, und da rath ich dir, reis du ins Graubünder Land, das ist das Athen der heutigen Jauner.“)

グラウビュンデンはクーア (Chur) を首都とし、スイスの東端に位置する最大の州 (Kanton) である。1786年には、ここから一盗賊団がシュトゥットガルトへ護送され、オイゲン公はそれに1,000グルデンもの費用を支払わねばならなかった、という事件があったが、必ずしもここが無頼漢の発生地である、と言うような一般的な伝説が流布していた訳ではなかった。シラーがグラウビュンデンに上のような烙印を押したのは、一つの魂胆があったからである。彼の学んだアカデミーには、ヴュルテンベルクの連隊の伍長、或は稀に下級将校上がりの監督官がいて、彼らは、共同寝室や教室で準備中の生徒の挙動を監視し、規律を整え、若い彼らの下着やその他の必需品を世話するのみならず、生徒の悪質な行動や罰則行為をも上官に報告する、などの任務を帯びていた。多感で激し易く、又出来る限り多くの自由を求めようとする若者達と、彼らに厳格な規則と秩序を課せようとする固陋な年配の男達との間には、無論、摩擦の絶え間がなかったに相違なく、一方が他方を公私に亘って過度に苛め、逆に一方が他方に怒り

と憎悪を抱くこともあったであろう。シラーも矢張、そのような監督官の一人の対象となった。その人物が、ビュンデン州クーア生まれのクプリー (Leonhard Ludwig Kuplie, 1727—1784) であった。そこでシラーは、『群盗』の中へ彼の周囲の多くの人物・事物が昇化され、普遍化され、芸術化されているように、ビュンデンを上記の箇所シュピーゲルベルクに盗賊国と呼ばせることにより、このクプリーに一種の „報復“ を試みようとしたのである。

しかし、この僅か数行の鬱憤晴らしが、思いがけない方向へ発展した。グラウビュンデン州にフォン・ザーリス (von Salis) なる一族があり、1781年当時、この一門の三人がハンブルクで学んでいたが、既にドイツ中の読書界を席捲していた『群盗』は、このビュンデン人達の目にも留まった。この時、彼らの家庭教師であり、又小説活動にも従事していたヴェストファーレン出身のヴレード (Christian Karl Wredow, ?) は、ドラマのその箇所に注目し、以前クーアでもフォン・ザーリス家の家庭教師をしていた事情から、そして、目下ビュンデン州の啓蒙化にも寄与していた所から、1781年12月13日、彼の関係していた雑誌 „Die Hamburgische Adreß-Comptoir-Nachrichten“ で、『群盗』の作者を叱正訓告する一文 „An den Verfasser des Schauspiels: die Räuber“ を発表した。この告発文はビュンデンにも送られ、在郷の士の大いなる共鳴を呼び、更に、アムシュタイン Johann Georg Amstein, 1744—1794) なる眼科医が、1782年4月末、クーアで発刊されていた週刊誌 „Der Sammler“ に、冗長で辛辣な意見を付け、„Apologie für Bündeln gegen die Beschuldigung eines auswärtigen Comödienschreibers“ というタイトルで、ヴレードの記事を掲載した。ここにもう一人、狂信的な共鳴者がいた。パンズィ (Heinrich Bansi, ?) である。彼は最初ハレで神学を学んで牧師となり、後年聖職を捨てて軍人となった人間であったが、その人物たるや、相貌逞しく、落着きなく、狡猾で、陰謀の為に生まれついたような黒ひげ

の大男であり、弁舌巧みな饒舌家で、見事な論理を激昂して雄弁に語り、聴衆の心を素早く読み取り、引き付け、思いの儘に操ることを心得ているような人間であったと言う。バンズィは、アムシュタインの弁明文を読むや否や、未だ4月中に、或は5月早々、直接シュトゥットガルトのシラーに手紙を書いて釈明を求めた。しかし、シラーから何の回答も得られなかった為、今度はビュンデンの博愛主義の結社 „Ökonomische Gesellschaft“ の国外会員で、ルートヴィヒスブルクで宮廷の庭園管理人を勤めていたヴァルター（Johann Jakob Walter, 1753—1787）に上記の弁明書を送り、シラーに、ビュンデンからの書簡は受け取ったのかどうか、尋ねるよう依頼した。バンズィの依頼を、恐らく8月に入ってから受けたヴァルターは、シラーと面談したのみならず、弁明書をオイゲン公に献呈までもした。結果は明白である。唯でさえ、既に不穏になっていたヴェルテンベルクとビュンデンとの関係が更に陰悪になることを懸念していた公は烈火の如く激怒し、直ちにシラーを再度ホーヘンハイムに呼び出した。公爵の顔からは父親らしい教育者と保護者の表情が悉く消えていた。支配者の仮借ない冷厳さで、彼はシラーに歩み寄り、怒鳴りつけ、非難の言葉を浴びせた。そして最後にこう言いながら彼を退出させた。「さあ行け。そしてお前に行って置く。今後は医学以外の書き物は何も、一切何も出版してはならぬ。わしの言うことが分かったか。お前に命令する。もう二度と戯曲を書いてはならぬ、さもないと免職して砦に投獄するぞ。」 („Jetzt geh Er und ich sag Ihm, Er lässt ins künftige keine andere, durchaus keine andere Schriften mehr drucken als medizinische! Hat Er mich verstanden? Ich sag Ihm, Er schreibt keine Komödien mehr bei Kassation und Festungsstrafe!“)

接見の後、シラーはその儘シュトゥットガルトへ帰り、例の「金牛館」で友人と共に九柱戯に興じた。表面上彼は平静で、陽気にさえ見えた。しかし内心は興奮し、千々に乱れていた。事態がこゝまで進んでは残された

手段に出るしか考えられなかったけれども、心の中は定めし様々の思いが去来したことであろう。公に対する義務のこと、家族のこと、そして負債のこと。君公への忠誠を破って逐電するなら、それはもう立派な脱走であり、どれ程の災難を家族に招来するであろう。尤も、オイゲン公が、既にシラーのアカデミー時代から生徒の行状と父兄のそれとを区別し、一方の非を他方に転嫁するようなことをしなかったことは唯一の救いであった。そして莫大な負債。即ち、前年に『群盗』を自費出版した際の借金及びその利息が数百グルデンにも達し、これに飲み代や賭博の負債等、全てを加算すると約1,000グルデンに垂んとしていた。しかし、これとてもマンハイムでよい仕事をすれば返済できるであろう。それよりも、自分は既にドイツの詩人である。あの、シュヴァーベン精神界の指導者、シューバルトも僕のドラマを絶讃し、僕の未来を約束した。小説家で旅行家の、あのニコライでさえ、僕の下宿まで訪ねて来たではないか。恐らく、二度と故国の土を踏むことも、愛する家族の者と相見ること叶わぬかも知れない。だが、この儘ここに留まれば僕はどうなる。囚人同然ではないか。最早シュヴァーベンの何処にも、僕の芸術を伸ばせる土地も場所もない。僕は天命に従わねばならない。

シラーは、頌詩を作ってオイゲン公の心を和らげては、と言う友人らの勧めを拒絶して、9月1日、文筆活動と外国との交渉を禁止する命令を撤回して欲しい、との嘆願書を公爵に提出した。彼はこの中で、これまで書いた文学作品は、陛下から頂く俸給に加えて、550グルデンの増収を齎した(勿論真赤な偽りであるが)、そして、外国の偉大な知識人との文通と、研究に必要な、この補助金のお蔭で識者の世界で計り知れない幸運を得ることが出来た、もし、この補助手段を放棄せねばならなくなると、自分の研究を計画的に進めて行くことが出来ない、と訴え、自分がアカデミーの生徒の中でも、この広い世界の注目と尊敬を集めた最初で唯一の生徒であることを誇りに思うし、それは又、自分の教育の恩恵者たる公爵のみに帰

さるべき名誉であると述べながら、以後の作品は全て厳しい検閲に委ねる、と誓っている。しかしながら、彼が逃亡後、カルル・オイゲン、アカデミーの校長、ゼーガー (Christoph Dionysius von Seeger, 1740—1808)、姉のクリストフィーネ (Elisabeth Christophine Friederike, 1757—1847) 及び友人のヤコービ (Christian Friedrich Jacobi, 1759—1812) に書き送った手紙から推断されるように、彼は既にこの時点で、この請願書によって逃亡の口実を準備し、併せてオイゲン公の怒りを家族の為にも能う限り防止する手段を未然に講じて置く、という目論見を持っていたと考えられるのである。が、それは兎も角、この嘆願書は徒に公爵の瞋恚を深めるだけであった。彼はこれに一度も目を通さなかったばかりか、オジェ將軍に、シラーが今後再び自分に何らかの書状を呈しようものなら即座に逮捕せよ、と言い渡した。

Der Würfel ist gefallen. 行くべき道は決した。

シラーの逃亡計画に関与したのは、信頼できる僅かの友人たち、即ちアカデミーの教授アーベル (Jakob Friedrich Abel, 1751—1829)、同期生で今は他の歩兵連隊の少尉となっていたシャルフェンシュタイン (Georg Friedrich Scharffenstein, 1760—1817)、シュトゥットガルトで司書をしていたペーターゼン、そして就中シュトライヒャーであった。既述のように、シュトライヒャーは、1783年春ハンブルクへ旅立ち、そこで親戚の援助を受けながら、バッハに師事する積もりであったが、この畏友の為に、同じくシュトゥットガルトに住んでいた母親の許可を得て出発を早めたのであった。友人らと共に、シラーは逃亡に最適の時期を捜した。折しも、9月の半ば過ぎにロシアの大公パウル (後の皇帝パウル一世) が、オイゲン公の姪に当る妃、マリーア・フィオダラヴナを伴ってヴュルテンベルクの宮廷を訪問する予定であり、オイゲン公は、彼の権力を誇示する凡ゆる種類の盛大な催しで遠来の客を歓待しようと準備していた。そして、これには近隣諸国からも多くの貴族や著名人が招待され、マンハイムのダール

ベルクや舞台監督マイアー（Christian Dietrich Meyer, 1749—1782）の夫人もそれに含まれていた。ダールベルクは15日頃到着した。シラーは挨拶の為、彼を訪れたが、逃亡や援助に就いては曖気にも出さなかった。

20日頃、彼はシュトライヒャー並びにマイアー夫人と連れ立って、ゾリテューデの家族の所へ最後の訪問を行なった。彼の計画は母親と姉にのみ教えてあっただけで、父親には極秘であった。父が最悪の場合に、オイゲン公の軍人として、息子の逃亡計画は知らなかったと名誉にかけて主張出来る為であった。家に這入った時、母娘しかいなかった。父は催しの準備で奔走していた。普段は訪問客を愛想よく迎えるこの家の主婦は、別れを告げに来た息子に話しかけようとしても言葉が出なかった。やがて帰って来た父に客人の相手をさせ、シラーは気付かれずに母親とその場を離れた。シュトライヒャーは伝えている。「一時間後にシラーは座に戻って来た、が——母親は一緒になかった。どうして、彼女は姿を現わすことが出来たであろう……定めし、どれ程痛ましく『ごきげんよう』の言葉が双方から語られたか、それは息子の表情及び濡れて、赤く泣き腫らした目を見れば分かった。彼はこれを、いつものよく起こる病気の所為にしようとしたが、漸くシュトゥットガルトへの途上で、一行の、気を紛らわせる会話によって、再び幾らかの元気を取り戻すことが出来た。」 („Nach einer Stunde kehrte Schiller zur Gesellschaft zurück, aber — ohne seine Mutter. Wie hätte diese sich zeigen können! … Wie schmerzhaft das Lebe wohl! von beiden ausgesprochen worden seyn mußte, ersah' man an den Gesichtszügen des Sohnes, so wie an seinen feuchten, gerötheten Augen. Er suchte diese einem gewöhnlichen, ihn oft befallenden Uebel zuzuschreiben, und konnte erst auf dem Wege nach Stuttgart, durch die zerstreuenen Gespräche der Gesellschaft, wieder zu einiger Munterkeit gelangen.“)

ゾリテューデで聞き知った話によると、22日にはそこで大規模な鹿狩り

と演劇と9万個以上の提燈を使用した全山の壮麗な照明とが行なわれる筈であった。そして、全ての招待客と物見高い市民がそこへ出かけて、シュトゥットガルトの町は空っぽになるに違いなかった。シラーと友人は出発の日時を22日午後9時と定めた。更に好都合は、シラーの連隊がこの夜、市の城門での歩哨に立たず、それだけ彼は人目に付く危険性が少なかったことであった。

シラーの荷物——新たに仕立てさせた平服、下着、ハラー、シェークスピア、その他の詩人の作品等——は少しずつシュトライヒャーによって彼の家に運び込まれた。シュトゥットガルトでの最後の夜をシラーは、歩哨に就いていた友人シャルフェンシュタインの詰所で過ごし、彼に蔵書の一部を贈った。

明けて22日。午前8時、シラーは衛戍病院での最後の往診をした。10時には、申し合わせ通りに、シュトライヒャーの運ぶべき最後の荷物が全て整っている筈であった。友人は寸秒違わずやって来た。ところがどうであろう。何一つ用意されていなかったのである。何故なら、シラーが帰宅後書物を掻き集めている間に、ふとクロップシュトックの頌詩集が手に落ち、その中の一つの詩が以前特に彼の気に入っていたものであったが、今また改めて彼を感動させたので、それに対する返し歌を詩作していたからであった。この、一刻を争う時に、友人は先ずその頌詩に、次に対の詩に耳を傾けねばならなかった。シラーが詩から離れ、再び現実に戻った時には、既に長い時間が経過していて、万端整ったのは漸く午後のことであった。

午後9時、シラーは二挺のピストルを服の下に忍ばせてシュトライヒャーの家へ行った。両方共発射はしなかった。唯、身の安全と旅行の成功を祈って携帯して行くだけであった。路銀としては、シラーの23グルデンとシュトライヒャーの28グルデンを合わせて僅か51グルデンしかなかった。しかし、マンハイムまでの旅と、その後の数日の滞在には十分であった。二

つのトランクと小さなピアノを積み込んだ後、午後10時、遂に二人は車上の人となった。進路は先ずエスリンゲン門 (Eßlinger Tor) の方向へ取られた。ここが全ての城門の内でも最も暗く、まさかの場合には機転を利かして呉れるであろうシャルフェンシュタインがその夜の歩哨に立っていたからである。当時、馬車で行く者は幸い通行証の呈示を求められなかったが、シュトライヒャーは念の為にハンブルクまでの証明書を取って置いた。二人は既に何に対しても覚悟が出来、又恐れるものもなかったが、それでも衛兵の「生まれ、誰だ、下士官、執れ銃」の叫び声は彼らを縮み上がらせた。名前と行き先を尋問されて、シュトライヒャーはシラーの名を „Doktor Ritter“、自らの名を „Doktor Wolf“、そして行き先を「エスリンゲン」と告げた。門が開かれ、馬車はするすると走り抜けた。成功した、城門を後にした時、彼らは大きな危難から脱出したように思った。が、町の外側を迂回してルートヴィッヒスブルクへの街道に出るまでは、ほんの二、三語しか交わさなかった。やがて最初の丘を越えてから落ち着きと気楽さが戻り、会話は活発となり、話は極く最近の出来事から目前に迫った体験まで及んだ。

真夜中近く、ルートヴィッヒスブルクの左方の空の、際立って赤らんでいるのが見えた。そして馬車がゾリテューデの方向を向いた時、その高みに立つ城は広大な付属建築物と共に、遠方からでもくっきりと見える明かりの中に姿を現わした。この光景はシラーの心を騒がせないでは置かなかった。シュトライヒャーは、逃亡の日の最後の情景を次の言葉で結んでいる。

„Die reine, heitere Luft ließ alles so deutlich wahrnehmen, daß Schiller seinem Gefährten den Punct zeigen konnte, wo seine Eltern wohnten, aber alsbald, wie von einem simpathetischen Strahl berührt, mit einem unterdrückten Seufzer ausrief :

»Meine Mutter !«—

斯くして、シラーは狭隘な故郷シュヴァーベンから飛躍した。それは力任せの、急激な飛立ちであった。確かに、あの激しい内的必然性から、シラーは不自由な境遇を何れは脱していたかも知れない。しかし、それを促進し余儀なくさせたものが、1784年11月、彼自身、ラインのタリーアの予告 (Ankündigung der Rheinischen Thalia) で述懐しているように——「群盗は私から家族と故国を奪った。」 („Die Räuber kosteten mir Familie und Vaterland.“)——彼がそれによって一躍名声を成したばかりの『群盗』であり、分けてもあのグラウビュンデン事件だったのである。

以後彼が広い世界に如何に受容され、その中で如何に生きて行くか、それは次回以降の伝記で論じ度い。

参 考 文 献

- Karl Berger: Schiller. Sein Leben und seine Werke. 1. Bd. München 1910. C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung.
- Ernst Müller: Der Herzog und das Genie. Friedrich Schillers Jugendjahre. Stuttgart 1955. Verlag W. Kohlhammer.
- Herbert Kraft: Andreas Streichers Schiller-Biographie. Mannheim 1974. Bibliographisches Institut.
- Andreas Streicher: Schillers Flucht von Stuttgart und Aufenthalt in Mannheim von 1782 bis 1785. Hrsg. von Paul Raabe. Stuttgart 1968. Philipp Reclam jun.
- E. Franz Anders: Schillers Flucht aus der Heimat. Berlin 1887. R. Gaertners Verlagsbuchhandlung.
- Herbert Meyer: Schillers Flucht. In Selbstzeugnissen, zeitgenössischen Berichten und Bildern dargestellt. Mannheim 1959. Bibliographisches Institut.
- Reinhold Steig: Schillers Graubündner Affäre, in: Euphorion. 12. Bd. Jahrgang 1905. Wien und Leipzig. S. 233—262.
- Gero von Wilpert: Schiller-Chronik. Sein Leben und Schaffen. Stuttgart 1959. Alfred Kröner Verlag.
- Fritz Jonas: Schillers Briefe. Kritische Gesamtausgabe. 1. Bd. Stuttgart 1892. Deutsche Verlags-Anstalt.

Schiller auf der Wanderung von Stuttgart bis Leipzig

(Versuch einer Biographie)

Tokuya Yakame

Einleitung

Wie Schillers Schaffen durch viele dramatische Meisterwerke charakterisiert wird, so ist auch sein Leben als ein großes Drama anzusehen. In der Geschichte der deutschen Literatur lebten nur wenige Dichter so rechtschaffen, edelmütig und streng aus Religiosität und Sittlichkeit wie Schiller, aber zugleich auch wenige so tatkräftig und dramatisch nach dem Drang der Leidenschaft. Das Drama seines Lebens jedoch verlief nicht immer glatt und reibungslos. Immer wieder hatte er mit Enttäuschungen, Krankheit und Armut zu kämpfen. Zufriedenheit und Glück genoß er nur selten. Keine Zeit war wechselvoller und miserabler für Schiller als die von September 1782 bis April 1785, wo er aus Stuttgart floh, um Theaterdichter in Mannheim zu werden, zunächst in Frankfurt und Oggersheim wohnte, dann nach dem Scheitern seiner Hoffnungen in Bauerbach Zuflucht fand, danach wieder in Mannheim seiner Tätigkeit als Dramatiker nachging, jedoch nach bitteren Erfahrungen fortgehen mußte, um sich endlich in die ihm Rettung bietenden Arme des Körner aus

Dresden zu werfen.

In meinem Aufsatz will ich die Notjahre Schillers in einer Serie biographisch schildern, wobei ich mich in manchen Punkten auf die Schiller-Biographie von Andreas Streicher stützen werde, der während dieser Krise der teuerste und unentbehrlichste Berater und Gefährte für den jungen Dichter blieb und sich treu und selbstlos für dessen Wohl und Erfolg opferte. Ich will als ersten Teil meiner Arbeit die Epoche vom Erwachen des Wunsches, nach Mannheim zu übersiedeln, bis zur Verwirklichung der Flucht behandeln.

1. Die Flucht aus Stuttgart

Als Schiller Anfang des Jahres 1782 an der Premiere seiner »Räuber« in Mannheim teilnahm, erschienen ihm die Welt und auch sein Leben ganz anders als bisher. Wie eng und kleinlich war doch Stuttgart, die Hauptstadt des absolutistischen Württemberg, „dieser Norden des Geschmacks“, wo er als Regimentsmedikus seine dichterische Freiheit beschränken mußte, im Vergleich mit jener Kulturstadt Mannheim, wo „ein griechisches Klima“ herrschte und er im berühmten Nationaltheater noch heller glänzen sollte! Die zweite heimliche Reise dorthin steigerte seine Sehnsucht, dort wirken zu dürfen, und er bat den Theaterintendanten Dalberg mit drei klug und diplomatisch ausgedachten Vorschlägen darum, ihn durch ein schmeichelhaftes Schreiben an den Herzog Karl Eugen aus Stuttgart wegzuberufen.

Da ereignete sich ein unangenehmer Zwischenfall, der ihn dazu zwang, die Übersiedlung nach Mannheim zu forcieren und

möglicherweise die Flucht mit allen Mitteln zu erwägen: das Gerücht, daß Schiller ohne Erlaubnis nach Mannheim gefahren sei, verbreitete sich in der Stadt, und der Herzog, der davon Kenntnis nahm und ihn zu sich kommen ließ, verbot ihm jeden Verkehr mit dem Ausland und bestrafte sein Vergehen mit vierzehntägigem Arrest. Während Schiller Dalberg erneut um Rettung aus dem Dienst beim Herzog bat und auf Antwort wartete, gab es eine weitere verhängnisvolle Begebenheit, nämlich die sog. „Graubündner Affäre“, die den Entschluß zur Flucht unausweichlich machte. Die Stelle in den »Räubern« (II, 3), wo Schiller den Intriganten Spiegelberg reden läßt: „— auch gehört darzu ein eigenes National-Genie, ein gewisses, daß ich so sage, Spizbuben Klima, und da rath ich dir, reis du ins Graubünder Land, das ist das Athen der heutigen Jauner“, hatte einige Graubündner beleidigt. Der von einem Korrespondenten der Bündner informierte Herzog ließ Schiller abermals rufen und befahl ihm, künftighin keine anderen Schriften drucken zu lassen als medizinische.

Nach sorgfältigen Vorbereitungen floh Schiller mit Streicher in der Nacht vom 22. bis 23. September 1782. Es ist denkbar, daß Schiller früher oder später Stuttgart verlassen hätte. Es war aber gerade sein Erstlingsdrama, und die in diesem enthaltene Stelle über Graubünden, was ihn zur Flucht zwang. Er meinte später: „Die Räuber kosteten mir Familie und Vaterland.“